
サバイバルゲーム

小林伸三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サバイバルゲーム

【NNコード】

N8793M

【作者名】

小林伸三

【あらすじ】

鈴木義弘は、コンバット（接近戦）の達人、土方の教えを受け、近く開催されるサバイバルゲームの指揮官になる予定。

後輩の山下の勧めでフィリピンのダバオへ旅行する。旅行先でバスがゲリラに襲われる。鈴木は、殺された運転手が持っていた拳銃を拾う。

さあ、どうする。全員ゲリラの人質になるか、それとも戦うか。本物の銃を使ったことがない鈴木が、ゲリラに向かって銃を撃てるか。

サバイバルゲーム

サバイバルゲームの基地

東名高速道路下りを赤いマツダロードスターが疾走している。

2シーターの運転席には山下努、助手席には野村栄一が乗っている。東京料金所から下りを約一時間走り、御殿場インターを出て、箱根乙女峠方面へ、ゆるい坂をしばらく走る。野村が地図を広げて指示した通りに右折して、舗装のない山道を登る。両側の杉林の所々に赤く色づきはじめた雑木が見え、山は秋の気配がある。

「こりゃだんだん道が悪くなるよ。スポーツカーで行けるのかなあ、わだちにはまつて腹が擦っちゃうよ」

山下は、だんだん心配になってきた。

「これは君の車だから、僕は知らないよ」

「無責任なこと言つなよ」

せまい山道をくねりながら行きづまる、わりあい広い駐車場があり、屋根の勾配の大きな二階建てのログハウスの山荘があつた。

玄関でボタンを押すと長袖の花柄ワンピースの若い女性が出てきた。

「鈴木先輩とは連絡済みで、私は大学時代の後輩で山下といいます。あなたは妹さんですね。兄さんからあなたのことは聞いてました。こちらは野村くんです」

「はい。妹の亜紀です。兄からお出でになること聞いています。どうぞお入り下さい。今、兄は外出中ですが、もうじき戻ってきますから、こちらへどうぞ」

玄関の、次の扉を開くとそこには広いホールがあった。中心に十人は座れる応接セット、周りの壁には多数の各種小銃が掛けたり、壁にそつてガラスケースが並んでその中には拳銃がびっしりと並べられている。別のガラスケースには各種のサバイバルナイフや戦闘員用具が展示されている。応接セットの近くの床には、ひとりわ大きい実物の重機関銃が柵に囲われて置いてある。

「山下君いったいここは何なんだ。君の先輩は何屋なんだ。」

ソファーアーに向かい合つて座った野村は、始めて見た異様な展示物に驚いた。

「前に先輩に逢つたとき玩具屋をやつていると聞いていたんだけど、この機関銃は玩具じゃないね。この部屋の中にあるものも全部本物みたいだなあ」

山下も、今まで見たことのない展示物だった。

亜紀が「コーヒーをはこんできた。テーブルに置きながら「モデルガンショップをご存じありませんでした？ ここに有るのは、その機関銃以外は全部モデルです。子供の玩具と違つて高級に作られているので値段も高いし、大人の玩具です。マニアのコレクション用なんですよ。父が朝霞に工場を持つていてそこで作っています。上野と浅草にお店があるんですよ。ここはショールームで、サバイバルゲームの基地でもあるんですよ。土日にはマニアの人たちが集まつてサバイバルゲームをやるんですよ」

「サバイバルゲームって何ですか」と野村が聞いた。

「一口に言えば大人の戦争ごっこです。私も兄に誘われて参加しますが、なかなかむつかしいんですよ。弾が飛んでくるんですよ。当たつても少し痛い程度ですけど」

「僕には理解できないなあ。銃つて人殺しの道具でしょう。銃と麻薬とかで悪のイメージが有りますよね。ましてや戦争ゲームなんて平和を求める日本人の心理逆行しているようで、恐ろしい趣味ですねえ」

「野村。お前ずいぶんはつきりものを言つなあ。失礼じゃないか」

山下は、野村の唐突な意見に狼狽した。

「いいんですよ山下さん。そのうち兄が帰つて来ますから兄たちと
続きを討論して下さい。いつもそれが始まつたら終わらないんだか
ら」

サバイバルゲームの訓練

山荘の裏山で、迷彩服のソルジャーが一人、林の中を駆けめぐりながら、M16モーデルサブマシンガンで撃ち合つている。鈴木義弘とひげの先輩土方恒夫である。

ヘルメットと、目に「ゴーグル（保護眼鏡）をかけ、ブッシュの陰を駆け抜けて杉の木の陰へ身を移した鈴木は、土方の姿を見失つた。とたんに思いがけない右側数メートルからBB弾（樹脂製の弾）を浴びてしまった。

「またやられた。先輩はどうしてそんなに強いんですか」

二人は戦闘の経過を話しながら、山荘への道を戻つて来る。

「ポイントはスペアマガジン（予備弾倉）の入れ替えタイミングにあるんだ。

我々はマガジンに実銃と同じ弾数しか入れていないから、撃ち合えば弾は必ず切れる。予備のマガジンに取り替えるとき、相手から目を離す。相手の居場所が分からなくなつて、きょろきょろしていると思わぬ所から弾が飛んでくる。初心者は相手を撃つのに夢中になつて、自分の残弾がどのくらい有るかを忘れてしまうんだ。だから予定無しに弾が切れてマガジン交換をすることになる。僕のやり方は計算ずくなんだ。相手の位置を確認して最後の一連射したら、目を離さずに思いきり場所を変えているんだよ」

「よく判りました。一対一の時は大抵そこでやられていますね。先輩は撃ちながら常にあと何発残っているかを計算しているんですね」「孫子の兵法に、敵を知り己を知れば百戦危うからず。と言うのが有るが、この場合、敵を知りは、敵の位置を完全に確認しているこ

と。「己を知れば、自分の残弾を知っていることと理解していいだらう。勝つためには、常に敵の位置や状況を捕捉していて、次の動きを予測できることが大切だ。それと共に自分の立地条件や能力を認識して最良の行動を考え出すのさ。もつと簡単に言えば、敵からはこちらが見えないのに、こちらからは敵が見えている状態を作り出せば必ず勝てる」

「なるほど、こちらだけが見えている状態ですね。僕はいつもその逆でやられていたんだ。小隊どうしの戦闘の場合の作戦を教えて下さいよ」

「ただ向き合つてやたらバンバン撃ち合つのは、下手のすることだ。相手に分隊の存在を認識させて派手に撃ち合い、ひそかにスナイパー（狙撃兵）を両サイドへ送つて、それで勝負をつけるんだ。先ず、敵が近いことが判つたら、早めにスナイパーを発進させて、本隊はわざと目立つように行動する。撃ち合いが始まつたら頭を引っ込んで銃だけ出してでもいいから派手に撃つんだ。敵の注意を中心に集めておいて、一気に両側から勝負を付ける。実戦だつたら手榴弾だろうね。射撃の腕も必要だけど勝敗は作戦で決まるんだよ」

「なるほどね。どの様な場合でも作戦が必要ですね。敵をこちらの作戦に巻き込んでしまうんですね」

「いちばんいい方法は、包囲先制攻撃だ。敵が気が付かないうちにこちらが見つけて、半円形に取り囲み一気に攻撃する。これなら絶対に勝つ」

迷彩服の二人は話しながら山荘の裏口から入ってきた。

銃談議

「やあ、来てたのかい。土方先輩と一緒にいたといふね」

鈴木は、支度を外しジャングルブーツを脱ぎながら、

「山下君。紹介するよ。土方先輩はサバイバルゲームの達人なんだ。実戦でも通用する腕と知識を持っている人だ」

「そうでもないよ。やあ、よろしく。義弘、実戦なんて軽々しく言

うなよ。日本人はもう六十年も実戦をやつていらないんだぜ」

「こちらこそ、よろしく、山下努です。こちらは同僚の野村です。

私は鈴木さんの大学の野球部の後輩で、東京旅行社の営業をしています」

「朝から土方先輩に強化訓練を受けていたんだ。近く開催するサバイバルゲーム大会で一方の指揮官になる予定なんだが、先輩を敵にまわしたらまず完敗だね。今日も三対一だ。作戦でやられてしまうんだよ。銃撃の腕には自信が有るんだけどね。ところで山下君の旅行社の仕事はうまく行っているかい」

「未だ駆け出しですから、お客様を集めるのがむつかしくて、それで今日は先輩にお願いがあつて来たのですよ」

「旅行に参加しろと言うのかい」

「フィリピンのミンダナオ島なんですが、あと一人集めないと団体割引にならないんです。特値を出しますから、参加して下さい。出发日まであまり日数が無いんです。コンダクターは私です」

「ああ、いいよ。出発日を後で教えてくれ」

「ところで先輩。この部屋の鉄砲やピストルは全部本物じゃないんですね。亞紀さんから聞きました」

土方が話を引き継いだ。

「その重機関銃以外は全部モデルガンだよ。その重機関銃は無可動銃と言つて、撃てなくしてあるから、無許可でコレクションできるんだ。日本軍の九二式重機関銃だよ。モデルガンは形も重量も作動も本物そっくりで、火薬を使って薬莢をエJECTするのと、ガス圧でBB弾を飛ばして同時にプローバックするがあるんだ。ただし本物の弾は飛ばないけどね」

「未だよくわからないけど、他には本物の銃は無いんですか」

鈴木が、答えた。

「我が日本国では一般人の拳銃の所持は絶対に認められないし、ライフル銃なども特定の許可をのぞいては、持つことは許されないん

だ。そりや本物の魅力はまた別物だけど、拳銃などは人を殺す以外にほとんど用のないものだからね、我が国の法律を支持するよ。僕達はあくまでもモデルガンマニアで、ガンの持つ怖い優美さとメカニックを手にして、本物へのあこがれを秘め、本物を想像しながら楽しんでいるんだよ」

「マニアの誰かが、いつかは本物がほしくなって、人間を撃つてみたいと思うようにはなりませんかねえ」

山下は、聞きながらも、自分が変な質問をしていると思った。

鈴木は、眉をひそめて、

「とんでもない。本物で人間を撃つてみたいとは誰も思わないね。我々マニアには銃と殺人は結びつかないんだよ。奥さん方が毎日使っている包丁と殺人が結びつくと思うかい。日本刀だって同じ気持ちだろうよ。持っている人が人間を切つてみたいなんて思やしないだろう?」

山下は、鈴木がテーブルの上に置いたモデル拳銃を持ち上げて、「それにしても、ほとんど本物の感じですねえ。ずつしり重い。これは何という拳銃ですか?」

「ベレッタM92F。イタリヤのベレッタだ。現在の米軍の制式拳銃さ。弾は9ミリ19、マガジンは十五発入り、ダブルカラームといつてマガジンの中に斜めに交互に弾が入っているので、グリップの厚みが少し厚めだる」

「かしゃっ」スライドを引いて見せる。撃鉄が上がりマガジンから薬室に一発装填される。

「火薬は入れてないので引き金を引いても大丈夫だよ。紙火薬を装填して引き金を引けば、発射音と同時にスライドが後退して空薬莢をはじき飛ばして次の弾を装填する動作をするんだ。まったく実物の動作と変わりないんだが、違うところは材質はABS樹脂だし実弾が飛ばないだけだ」

「以前に見たテレビ映画のコンバットでサンダース軍曹が持っていた自動小銃と自動拳銃が印象に残っているんですが・・・」

山下は、知つてゐる範囲の銃の知識をひっぱり出した。

土方が銃を取りに行つた。

「これだろ。トムプソンM1A1、トミーガンとも言つたサブマシンガンだ。サンダースが持つていたのはトンプソン1921SMGでこれより前の形式だ。自動拳銃はコルトガバメントM1911A1。両方とも45口径で弾は共通していた。ミリに直すと約11・43ミリ、デカイ弾を使つていたんだなあ。こんな弾が当たつたら衝撃が凄いだらうなあ。一発でアウトだねえ。ガバメントを持つてごらん」

「うん、これだ、これだ。何でもあるんですねえ。ガバメントか」

山下はガバメントを持つてスライドを引いてみた。

「こちらへ来てごらん。第一次大戦のなら、ドイツのルガーP08、ワルサーP38、日本の南部14年式、イタリヤのベレッタ1934、ベルギーはブローニング1910、まだあるぞ、モーゼルM712、これは皆自動拳銃だが、れんこん型弾倉のがリボルバーと言ふんだ。コルト、S&W（スミス＆ウェッソン）が有名だ。S&Wはダーティハリーの44マグナムを知つてゐるだろ。西部劇で有名なのがコルト45ピースメーカー・シングルアクション。ホルスターからどちらが早く抜くかと言つやつさ」

山下は、土方に誘われてガラスケースの側に立つた。

「これだけ本物そつくりだと、これで悪いことする奴が出ませんか」

鈴木が答えた。

「あるかも知れないね。もし強盗に遭つて、リボルバーを向けられたら氣を付けないとフイリッピン製の本物の場合があるかも知れないけどね、例えばワルサーP38やルガーP08のような名銃でホルドアップされたら笑つてやれ、本物が有るわけない。どちらにしても我々はだまされないがね」

さつきから野村は不満そうな顔をしていた。

「私は銃と言うものに否定的意見を持っているんです。銃があるから殺人が起きるし、銃の発達で指導者が戦争をする気になつたと思

うのです。だから日本人は銃を知らないほうが良いのではないですか。次の世代の子供達にはモデルガンといえども銃を持たせたくないありません」

突然の野村の意見に、土方は、ほうつておけない気になった。

「銃で人を殺したり、戦争を否定することは同感だが、それは銃のせいではなくて、それを持つ人の心のあり方だと思う。わが国では銃の所持を厳しく禁じているので、容易に一般人が銃を持つことはないが、世界の多くの国が銃の所持を禁じきれない実状があるのを、単に否定だけでは解決できないものがあると思うよ。銃に対してもただ目をつぶっていても何にもならない。むしろ銃の本質をよく知つていて、悪いことには使わない信念を養つた方が良いような気がするがね。それで我々は銃の勉強をしているんじゃないか義弘。どうだ?。話が真面目すぎるよ、まいったな」

鈴木が続けた。

「銃は歴史なんだ。織田信長が世界で始めて使つた長篠の合戦の三段撃ちで、天下を取つた。一八〇〇年代のアメリカでは銃の発達でインディアンに勝つた。コルト45ピースメーカーとウインチエスター連発銃だ。初期の先込め式単発銃では次発装填に時間がかかるて、インディアンの矢の方が早かつたんだ。歴史を批判することはできない。事実だからだ。今後、戦争は起きない方が良いし、起こしてはならない。しかし、相手のあることだから、相手国が攻めて来たら、何の防衛策も持たないで相手の蹂躪にまかせることができるかどうか。蹂躪って判る? 敗戦時のソ満国境で在満日本人にソ連兵がやつたことを知つてる? 無抵抗なのに男は殺され、女は犯され、金品食料は強奪されたんだ。僕がもしその場に居たら、命をかけても武器を持って抵抗したと思うな」

野村は、少し考え込んでしまつたが、了解したわけではなかつた。

「ソ連兵の蹂躪のこと始めて聞きました。それではサバイバルゲームは何のためにやつてているんですか」

鈴木は、困った顔をして、

「こんな話になると、僕達がまるで有事の際の軍事訓練をしているようだけど、モデルガンのコレクションやサバイバルゲームは全く違う感覚でやっているんだ。あくまでもコレクションであり、ゲームなんだ。剣道やフエンシングなんかも、切れない刀で試合をするじゃないか。サバイバルゲームも、当たっても死なない弾を撃ち合って勝負を楽しんでいるんだよ。マニアが集まると、銃の歴史や名称、構造、性能、操作、エピソードなどマニアックな話題に終始するんだ。モデルはより実物に近いもの求めて、その操作たるや、まるで神わざ。すばらしいガンアクションをするよ」

土方が、引き継いだ。

「モデルガンマニアにもルールがあるんだよ。ふざけても銃口を人に向けない。みだりに持ち歩かない。改造はしない。間違われて騒ぎになるし、社会問題化されたら自由にコレクションもゲームも出来なくなるからね。マニアはよくルールを守っているよ。悪いことに使う奴はマニアではないガンの知識の無い奴だ」

亜紀が、もり蒿麦を積み重ねて運んできた。

「あの、お話中ですけど、みなさんお蒿麦召し上がります?」

山下は、亜紀に満面の笑みを返しながら、

「はい、いただきます。お蒿麦食べてから、亜紀さんと二人だけで討論会をしたいんですが」

ミンダナオ島のダバオへ

成田国際線出発ロビー。山下は青い旗を持つて立つている。お客はほとんどが集合している。軽装の鈴木は小さなスーツケースを持って近づいていった。

山下は、最後のお客の鈴木が現れたので、ほっとした。

「やあ、お待ちしていました。無理を言ってすみません」

「フィリピンは前にも行つたが、ダバオは行ってないからね。ところでゲリラのうわさをテレビで見たけど大丈夫かね」

山下は、小声で

「他の人には言っちゃ困るんですけど、今朝の情報ではゲリラが外国人の乗った観光バスを止めようとしたらしいんです。そのバスはすきをみて逃げた。後ろから銃撃されたけど、けが人は無かったそうです。少し心配はありますけど、今更中止するわけにもいきませんし、まず、めったなことは無いと思いますけどねえ」

搭乗時間待つあいだ、今回ツアーメンバーが紹介された。六十を過ぎた老夫婦二組、中年夫婦一組、若者男性一人組、OJらしい女性四人組。それに鈴木とコンダクターの山下だ。

「先輩。きれいな女性がいますよ。旅行中に一人話をつけてお嫁さんにしたら。あとでゆっくり紹介しますからね」

「俺のことより、自分の心配をしたらどうなんだ」

「私の相手は、亜紀さんに決めているんです」

「聞いてないよ。いつの間に、そんな」

マニラ行きジャンボは飛び立った。

隣席に座った山下が説明した。

「マニラで、フィリピン航空のダバオ行きボーイング737に乗り換えて、一時間十五分でダバオに着きます。宿泊はダバオ・インシユラー・インター・コンチネンタルホテル。五つ星の本格的リゾートホテルです。この地の十一月はクールドライと言いまして、比較的涼しくて、しのぎやすいんですね」

到着当田、鈴木は、山下からプールサイドであらためて四人の女性を紹介され、嬉々としてプールで泳ぐ。

「明日はバスで観光をします。九時にロビーへ集合して下さい」

山下は、プールサイドで休む自分のお客様を確かめながら、ふれて廻った。

翌朝九時、ホテルの玄関に観光バスが来た。乗客は一五名とコン

ダクター、現地人の運転手と日本語女性ガイド。鈴木は座席を前方の窓際に指定された。隣にはコンダクターの山下が座つた。

ホテルを出発。椰子の並木のダバオの街を走る。ダバオ川を渡つて南へ五キロの丘陵にキリスト教の公園寺院があり、ここからはダバオ湾が見渡せる。

途中昼食をはさんで、チャイナタウン、博物館、仏教寺院をまわり、バスは山岳地帯へ入る。空は曇っているが、ダバオ山の山腹の展望台から眼前のジャングルの遙か向こうにダバオの市街地が見える。

展望台で、体の大きい現地人運転手と山下が話をしている。鈴木は景色を見終わって彼らに近づいていった。ゲリラの話題だつた。「運転手の話だと、ゲリラは約二十名。全員武装していて、現在政府軍が血眼で探し回つているそうです。この方面には居ないと思うが、念のため運転手はバスの中に拳銃を用意している。とのことです」

鈴木は、ドキッとした。本物を一度もさわったことが無いのだ。

「拳銃？。どんな拳銃か見せてほしいね。いいかどうか聞いてくれ」

山下は運転手に聞いた。運転手は先に立つて歩き出した。

「見せるそうです。バスへ来て下さい」

三人揃つて乗客の居ないバスに入つた。

運転手は、ハンドルの右側にある小物入れから、ホルスターにつっこんだ大きい自動拳銃を取り出した。

「おおっ。夢にまで見たベレッタM92Fじゃないか。さわっていい？。持つてもいい？。薬室に弾は入つていないうだから、マガジンを抜いてスライドしてもいいかい。デコッキングセーフティがモデルガンと同じだ。つめたくてずつしりいい感じだ。おほつ。本物だ」

「先輩。デコッキングセーフティって何ですか？」

「セーフティ。すなわち安全装置のことだが、この銃はセーフティレバーを上げると、雷管を突つつく撃針」と九〇度廻るので、絶対暴発しない構造になつてゐるんだ」

「先輩を銃器の専門家だと言つときました。彼の自慢の銃だそうです」

「この銃と君がいれば、私たちは安全だ。と、お世辞言つてくれ」「まかしとけだつてさ。更に、バスにはSOS用の無線機が取り付けてあつて、ボタンを押せば電波を発信し続ける装置があるそうです」

ベレッタを返すと「ボブ」と名乗つた。「ヨシ」だ。と答へ、笑顔の運転手と鈴木は握手をした。

銃はバスの小物入れに入れてあつたホルスターにつっこんでふたを閉めた。

三々五々乗客はバスへ戻つてきた。全員揃つた。発車。
ガイドがマイクを持つて、

「お疲れさまでした。この後はホテルへ戻ります。ホテルへ戻つてから約一時間後、六時からウエルカムパーティを開きます」
バスは山道をくねりながら下つていく。道の両側は鬱蒼としたジヤングルが続く。

「先輩、このジヤングルでは、一歩踏み迷つたら出てこれなくなるでしようね」

「ゲリラなら通れるんじゃないかな」

鈴木は、ゲリラのことが気になつてしまつがいい。
やがて平地になつた。市街地に近くなると道路は案外広く、道の真ん中だけが舗装されて両側は未舗装の部分が広く、ガードレールの外側は深く落ち込んでいるようだ。

快適に飛ばしていたバスがスピードを落とした。前方に自動小銃を持った兵士が一人、止まれの合図をしている。瘦せて小柄な男たちだが服装は米軍とそっくりだ。

「政府軍かな」

鈴木は、兵士の服装と運転手の態度でそう感じた。

「運転手が政府軍だと言つてます」

バスの中がざわめいた。鈴木は兵士の持つている自動小銃がなにであるか興味を持った。

「持つている銃は何だろ?」

距離があつてよく見えないが、バスが止まると、

「なんと旧式のトミー・ガンだ。リアサイトが三角に見えるから、M 1A1だ。こんな銃がまだ使われているとは驚いたな。山下君、うちで見たろう、コンバットのあの銃だよ」

「ああ、あれですね」

ゲリラ

突然一人の兵士が運転手に銃を向けた。運転手の顔色が変わった。運転手は急いでSOSボタンを押すと、小物入れからベレッタを取り出そと手をのばした。ふたをあけてグリップをつかんだが、ホルスターが付いてきた。

兵士の一人が運転手に向かつて撃つた。

「ダダダダ ダダダダ」

フロントガラスが全面にひびがはいり前が見えなくなつた。運転席の前だけが大きな穴があいた。運転手は座席に座つたまま後ろへのけぞり、次にハンドルに突つ伏した。頭から出た血が床へ流れてきた。即死だ。

「山下君。ただ事ではないことが起こつた。奴らは政府軍に変装したゲリラだ。いきなり運転手を殺すはどういうことだ。これではみんな殺される。どうしよう。何をすればいい」

「どうしましようか。大変だ」

乗客は恐怖で声も出なく、座席ですくんだままだ。女性のガイドは通路のいちばん前でしゃがみこんでいる。

鈴木はぐわーと腹が立つててきた。「ボブを殺しやがつて」「どけつ」

鈴木は突然、隣に座っている山下を押しのけて通路に立つた。

「みんな座つてろ、何が起こつても絶対声を出すな」

鈴木は運転手の右手下に落ちているベレッタを拾い、ホルスターを抜いて捨てる。セーフティをはずしてスライドを一回引いて弾を装填し、運転席右側に流れている血を、寝ころがつて背中にべつたり付けると、足を右側の出入口に向けうつ伏せになつて死んだまねをした。ベレッタは胸の下に隠した。

二人のゲリラが出入口の外で叫んでいる。

「OPEN」

うつ伏せのまま鈴木はガイドに言つた。

「ドアを開けて急いでいちばん後ろへ行け」

ガイドはドアのレバーを引くと通路をいちばん後ろへ走つた。

ゲリラの一人が出口の階段を上がつて来て鈴木の左側腰のあたりに立つて銃を構え、死んでいる運転手をちらつと見て、通路を見渡した。もう一人が階段を上がつて来た。鈴木は気配でそれがわかつた。一人目が鈴木に銃を向けて靴でつづいた。突然鈴木が右へ転がると、一人目のゲリラの顔へ向かつてベレッタを両手で持つて続けて一発発射した。ものすごい発射音だ。顔から頭へ抜けた弾はヘルメットを吹き飛ばし、仰向けに倒れ階段へ逆さに落ちた。泡を食つた一人目のゲリラは急には体勢を変えられない。鈴木の方に向きなおつたとたんにベレッタの銃弾をまたもやあごから頭へ一発あびて、通路の方向へ仰向けに倒れた。

急いで立ち上がつた鈴木は「さあ、えらいことになつたぞ」と思つた。

乗客が騒ぎ始めた。座席で腰を浮かして硬直している者、顔を覆つて恐怖の低い声を出す奥さん達、O-Lたちは抱き合つてふるえている。

「ゲリラは一人だけではないはず。やがては異変に気が付いて、大勢駆けつけて来たら全員命はない。逃げなければ。さあどうする」

鈴木は、出入口から片目だけを出して、バスの右前方をそっと見た。だいぶん距離はあるが、道路脇の林の中に動いている迷彩服のゲリラの姿が見える。

「今のうちだ。バスに隠れて左後ろの道路の向こう側へ隠れよう」レバーを押してドアを閉めた。ベレッタのセーフティをかけてすぐ戻し、ダブルアクションでいつでも撃てるようにした。

死んでいるゲリラの間へ立つて鈴木は大きな声で言った。

「全員助かりたかつたら私の言つことを聞け。指示有るまで立つな。今からバスを出て逃げる。バスの左後ろの方向へ行く。靴音を立てるな。声を出すな。見つかったら全員殺される。荷物は身に付く物以外持つな。いちばん後ろの人は非常口を開ける。開け方はガイドに聞け。道の端へ着いたらガードレールを越えてのり面に張り付いていろ。絶対のぞくな。弾が飛んでくる。非常口が開いたら、後ろの席から順に立つて出る」

「この中に銃を扱える人がいるか」

初老の男と中年の男が手をあげた。

初老の方は「自衛隊の退役者です」

中年の方は「現職の警察官です」

「ありがたい。手伝つて下さい。死んでる奴等のサブマシンガンを取つて下さい。スペアマガジンも探して。早く、早く」

初老の元自衛官は、すぐに席を立つて通路のゲリラの死体をあさつた。

「スペアは一本持つてますね。手榴弾を一つ持つてますよ

「それも取つてこちらへ下さい。山下君手榴弾を持つててくれ。さあ、早く出よ」

中年の警察官は、階段で逆さになつている死体のサブマシンガンとスペアマガジンを取り上げたが、手榴弾には手が届かない。

「奴等、拳銃を持つてますよ。これガバメントでしょ」

山下も武器あさりに加わった。

「それも取れ。できればヘルメットもだ。早く、早く」

乗客たちは鈴木の指示通りの方向へ急いでいる。先頭はもうガードレールをまたいでいる。

「ガードレールの先がどのような地形になつてゐるかが心配だな」

銃の経験者一人はそれぞれトミーガンを一丁づつとスペアーマガジン一本づつを持ってバスの後部から出ていった。山下は二つの死体の腰から拳銃を抜くと、ころがつてゐる血の付いたヘルメットも二つ拾つて、少し遅れて駆け出していった。

鈴木はベレッタのホルスターを拾いながら、もう一度バスの小物入れをのぞいた。ベレッタのスペアーマガジンは見つからない。

「四発撃つたから残り十一発か、心細いな」

と、つぶやきながら、バスを最後に出た。

バスから道路端まで五十メートルぐらい振り返るとゲリラの姿は見えないが、

「おそらくバスの向こう側に來てゐるに違いない。避難場所の道ばたに走り込むまで間に合つかな」

走りながらもう一度振り返る。

「仲間の死体を発見したら、奴等は怒るだらうな。きっと皆殺しにされる。奴等の最初の目的は外国人を人質にして政府と何かの交渉をしようと思っていたのではないかな。俺は、それをはずみで殺してしまつた。もう戦うしかない」

鈴木は、最後にガードレールをまたいだ。予想どおりそこは道路ののり面で急な斜面になつていて、その下はコンクリートで固めた狭い水路になつてゐる。のり面の長さは約五十メートル、両端は水路を渡る道になつていて水路は土管になつてゐるようだ。中央付近

にも低い位置に土管のトンネルがあつて、向こう側へ行く狭い道が付いているが、水路の向こう側はのり面が急で老人たちは登れそうもない。これでは逃げ道が無い。乗客たちは中央位置の、のり面に固まつて張り付いている。

乗客達が中央位置に走り込むのをゲリラに見られたに違いない。中央位置は戦闘正面にして非戦闘員は右翼へ退避させよう。と鈴木は思った。

「銃を持った二人は残つて、あなたたちは右の端まで移動しなさい。絶対に道路へ頭を出すな。山下君も残れ」

移動しようとする中年の男性と若い男性を呼び止めた。

「あなたたちに拳銃を渡す。ガードレールから覗いた奴は、躊躇なく撃て。弾を込めておく。暴発しないようにセーフティを掛けておく。撃つときはここをこつ下げる。いいね。躊躇するな。躊躇したら死ぬぞ。一発はぶち込め。さ、向こうでみんなを守れ。弾は七発入っている」

コルトガバメントを渡された二人はそれを両手で受け取つて、顔面蒼白だ。

鈴木はズボンのベルトにホルスターを通り、ベレッタを腰におさめながら、ガードレールの柱のかげから右目だけを出してゲリラ側を見た。道路の向こう側に人影が見える。

「もう仲間が殺されたこともわかつて、怒つてこちらへ攻めて来るころだろ？ こちらが武器を持っていることは知つているだろ？ バスのドアーは開かないはずで、ガラス越しに確認したのなら気がつかないかもしね。いや、それは甘いかな」

乗客の若い男性がワイシャツを持つて来てくれた。鈴木はべつとり血の付いたシャツを脱いで、捨て、急いで着替えた。

乗客達は、割合落ちついている。これから始まろうとする事態を、予想できないのだろう。お願いだから、事態の急変にパニックを起こし、騒いだり、走り出したりしないでもらいたい。一人のパニックが全員を殺しかねないのだ。

鈴木はゲリラ側を、時々見張りながら言った。

「お一人さん。年上の人には乱暴な口をきいてすみません。こんな場合ですからお許し下さい。ゲリラを一人殺したからきっと怒つて攻めて来るでしょう。もう戦うしか方法はありません。負けたら皆殺しにされます。銃を使えるあなた方が頼りです。私の独断が良いか悪いかの批判は後にして下さい。お名前を伺つても咄嗟の場合出ないかも知れないので、失礼ながらあなたを一番、あなたを一番と呼びますので、承知して下さい」

元自衛官を一番。警察官を一番と命名した。

「ところでトミーガンの操作はできますか?。セーフティをファイアーにしてコッキングハンドルを引いて放せば後は撃つだけ、簡単です。このレバーを親指で押してマガジンを交換します。このセレクターはフルでいいです」

一番の元自衛官は、ニヤリとして、

「私はよく知っています。だが、未だ人を撃つたことは無い」

一番の警察官は、

「私は拳銃以外撃つたことがない。でも解りました。大丈夫です」

鈴木は、二人の方に向きなおつて、

「これから言うことをよく聞いて下さい。私に戦闘の指揮をとらせて下さい。いいですか。指示するまで絶対頭を出さないで下さい。一番撃て、と言つたら一番だけが引き金を引きっぱなしで掃射するんです。三十発入りですから、約三秒で撃ち終わる。撃ち終わったらすぐ頭を引っ込める。一番撃てと言つたら一番が掃射する。一番はその間にマガジン交換をする。というわけです。狙つて撃つてたら、いわゆるバースト射撃（小刻みに撃つ）では、こちらも狙われます。一番は右側、一番はこちら左側に位置してください。マガジンがつかえるから、寝ては撃てないですよ。照準は上のオープンサイトを使って足もとを狙つて下さい。連続射撃は銃口が跳ね上がりますからね。それから、どちらかの銃のマガジンは運転手がやら

れたとき弾を使っているから、半分ぐらいしか入っていなければ。
調べてマガジンを取り替えておいて下さい。撃つた後は銃身にさわ
らないように。火傷をしますから

「マガジンを点検した一番が言った。

「撃つてあるのは、私のです」

山下は持つている血の付いているヘルメットを草で拭き、二人に
渡した。

「山下君は手榴弾だ。合図をしたら、こうやつて握る、ピンを抜く、
投げる。これだけだ。投げてから四秒で爆発する。怖くない。君な
ら出来るよ。野球部では外野手だったからね。できるだけ上の方に
投げた方がいいよ。その土管の橋の上に居てくれ」

迎撃戦闘

乗客たちは土手の右端の、のり面に伏せている。一人が拳銃を持
つて上を見ている。

「乗客たちの居場所がばれたら大変だ。手榴弾を投げ込まれる。ゲ
リラから見て皆中央部に居ると思わせたい」

鈴木はしばらくガードレールの柱から右目だけを出してゲリラ側
を見ていたが、緊張して言つた。

「来たぞつ。五人だ」

手に自動小銃を持つた迷彩服のゲリラが五名散開してゆっくりこ
ちらへ来る。

持つている銃は、カラシニコフAK47のようだ。

「先ず、手榴弾で先制する。この方向。手榴弾用意」

「投げろつ」

山下は相手は見えないが、示される方向に思い切つて投げた。沈
黙が走つた。

「バーン」

鈴木はゲリラの後ろで爆発するのを見た。一人が銃を放り出して

倒れた。他は姿勢をかがめて進退を躊躇している。

「一人やつた。続けて投げろつ。同じ方向、少し手前」

山下は少し力を抜いて一発目を投げた。フライを打ち上げたように飛んだ手榴弾は四人のゲリラの前へ落ちると同時に爆発した。鈴木は思わず目を引つ込んだ。ゲリラは全員地面に伏せていて助かつたが、起きあがり、一斉にサブマシンガンを乱射しながら姿勢を低くして前進してきた。ガードレールにガンガン弾が当たつて跳ね返つた。一部は地面に当たつて跳弾となり、跳弾音とともに砂利を跳ね上げた。鈴木は息がつまつた。

「うふあー、これは本物の戦闘だ。実弾が飛んでくる」

一瞬、射撃が止まつた。

「マガジンを交換している。今だ」

「一番撃てつ」

一番が左右に掃射をして三秒で撃ちつくした。三人倒れた。うち一人は這つて戻ろうとしている。

「一番撃てつ」

残つた一人はたちまち倒れ、這つていた者も背中を撃たれた。

「撃ち方止め。全部やつたぞ」

「先制攻撃は成功した。だが、この後ただで済むわけはない。自分がゲリラの隊長だつたらどうする？ このあと何をする？」

鈴木は、目まぐるしく頭を回転させた。

ガードレールの柱のかげからじつと田をこらしてゲリラ側を見ている。向こう側で何か動いている。

「そうだ。手榴弾だ。ものすごいのが来るぞつ。一番は右翼へ避難。一番と山下君は左翼へ避難。急げ」

鈴木は、叫びながら確信を持った。

「手榴弾に違いない。俺だつたら必ずそうする。こちらは中央部から攻撃したから、ゲリラはきっと中央部へ投げてくるだろう。いや、そう願いたい。違つたら大変な事になる」

鈴木は未だ目だけ出して見てゐる。ゲリラが五人並んだ。

「来るぞつ」

鈴木は左翼へ避難した。

「伏せろつ、伏せろつ」

手榴弾が五発一度に飛んできた。「ぱた、ぱた、ぱた」と土手に落ちる音。身の縮む思いだ。

「ドカドカドカドカドカーン」

煙が風に流され飛んでゆく。鈴木は顔を上げて見渡したが、皆無事のようだ。

「もう一回来るぞつ」

一回目が飛んで来た。今度は三発は土手へ落ちたが、二発はガードレールに当たつて跳ね返つて道で爆発した。

「ドカドカドカドカドカーン」

鈴木は、もう生きた心地はない。煙が風に流されて晴れると乗客たちの様子が見えた。誰も怪我をしていないようだ。理由が判つた。手榴弾は全部土手下の水路へ落ちて爆発したのだ。なんと幸運なことか。

「ゲリラはすぐ攻めてくるぞ。手榴弾で攪乱しておいて突っ込んで来るのは、歩兵戦の常道だ」

「一番、一番。位置へ戻れ」

鈴木は叫びながら見張りの位置について、ガードレールの柱のかげから目を出した。五人のゲリラが自動小銃を腰にかまえて広く展開して走つてくる。

一番が位置についた。続けて一番が位置についた。もう道路を半分横切つて、走つてくる。

「一番撃てつ」

一番はのり面に立て膝をして、ガードレールの下から引き金を引きっぱなしで左右に掃射をした。マガジンの三十発は、約三秒で撃ちつくした。ゲリラは何人かが倒れた。弾が当たったのか、伏せたのかわからない。

「一番撃て」

一番は目標が散乱して撃ちにくかつたが、自動小銃を腰だめで乱射しながら走つて来る一人には確実に当てた。その他は伏せている奴に撃ち浴びせたが、効果はわからない。撃ちつくすとすぐ頭を引つ込めた。

「一番撃て」

伏せていたゲリラが一人、立ち上がって向かってきた。これを一番の掃射が確実にとらえた。

「撃ち方止め。また五人やつた」

道路には十人のゲリラの死体がころがつている。

「凄かつたなあ。もう弾が無くなつた。そちらは？」

「一番が、一番に尋ねた。

「半分のがもう一本あるだけ。この後はどうなるんでしょうね」

「一番は答えながら、なりゆきを心配した。

「ここからは、鈴木にも予想がむつかしかった。

「今度も攻撃を回避できた。だが、もう一度攻撃されたらおしまいだ。もう弾が無い。ベレッタの拳銃弾が十発ぐらいあるがサブマシンガンに対抗しては、ほとんど役に立たない。さあ、ゲリラは次はどう出てくるか」

鈴木は目だけを出して更に見張る。

「もう正面攻撃はしてこないだろう。奴等も犠牲が多すぎる。でも、あきらめて退避するわけはない。ゲリラの隊長はかんかんに怒つているに違いないから。あと何人居るかな。最初二十人居たとすれば、十二人やつつけて、残り八人だ。なぜか五人づつ攻撃して來たことを考えると、五人が一分隊なんだな」

鈴木はいろいろと思ひめぐらしながら言つた。

そばに伏せている山下がうなずいた。

人影が見えた。

「また五人だ。あれ？」

二人は右へ、更に一人が左へ姿勢を低くして行動開始した。迂回両面作戦だ。一人が中央に居るのが見える。

「一番。急いで右翼へ知らせて下さい。二人右翼へ回った。ガバメントの二人はうまくやれるかどうか。教えた通り、覗いたら撃つんだ。五メートル以上離れたら拳銃では当たるはずがないから。もう一度よく教えて」

一番はちょっと手を上げて、OKして右翼へ行つた。

「一番は私と交代してここから中央にいる奴を見張つて下さい。私は左翼へ回った奴を引き受けますから。ヘルメットを外して目だけを出しているんですよ」

一番はうなずいて位置へついた。

「山下君。左翼へ行こ。一応ゲリラの動きに対応したはずだが、一つでも失敗があると、乗客の集団に手榴弾を投げ込まれて全員死亡ということに成りかねない。特に右翼は事前にこちらの意図を察知されたら、おしまいだ。左翼もサブマシンガンが無い状態で我々の存在を発見されたら、拳銃では応戦できない。たちまちやられるだろう。ゲリラに一人でも通られたら、全員やられるだろ?」
「もう、お仕舞いですかねえ」

「たぶんね」

鈴木はもうほんと絶望して土手ののり面に伏せていた。右翼を見ると全員が緊張してのり面にへばりついている。ガバメントが二丁、空を向いている。「セーフティを外したろうなあ」

突然ガバメントの発射音が続けて四発響いた。

「なんと、やつてくれた」

ガードレールに一人のゲリラが倒れて引っかかっている。

見張りをしていた一番は、中央に残った一人のゲリラが、手榴弾を取り出し右翼へ数歩動いたのを見た。急いでトミーガンを構える

と、ガードレールの上から道路まで身を乗り出して、照準は真ん中のピープサイトで丁寧に狙つた。手榴弾のピンを抜いて今にも投げようとしているゲリラに向かつて、引き金を引きっぱなしで撃つた。残り少ない弾数だが、幸運にもどれか一発が命中したのだろうゲリラは倒れ、手榴弾が続けてその場で爆発した。一番はすぐに、飛び降りるように、のり面にかくれた。

「真ん中の奴をやつたー」

のり面に四つん這いになつた二番が、うわずつた声で叫んだ。

荒い足音がした。鈴木達は硬直した。一人のゲリラが二番の方を見ながらガードレールをまたいだ。目の前だ。のり面へ降りてから二番を狙つて構えようとした。鈴木はのり面から起きあがつてゲリラの背後からベレッタを両手で構えて一発発射した。乾いた発射音。一人のゲリラは背中を撃たれて、もんどりうつた。もう一人がサブマシンガンと共に振り向いた。一瞬早く、これにも一発発射した。胸に穴があいて大仰に倒れ、のり面をころげ落ちた。

「うわー、やつた。やつたあ」

山下が喜んだ。

鈴木は「ふうっ」と息を吐いた。今まで緊張で息をしていなかつたのだ。もう全身の力が抜けて放心状態になつて倒れてしまつた。「もうだめだあ。未だ生きているのが不思議なくらいだ。短時間の間に起こつたことが、あまりにも過激すぎた。俺は銃の操作や作戦は半ば習性化しているけど、恐怖に耐える訓練は何もしていないんだあ。怖かつたあー」

鈴木は泣き声になつていた。

「先輩、しつかりして下さいよ。まだ終わつてませんよ。次の指示は？」

「もう何もできない。始めて人を殺した。理由はともあれ人を殺した」

ベレッタを持つたまま、ショックで起きあがれない。そばに居た

山下が立ち上がりながら心配そうな顔をした。

「一番は引き続き見張りをしている。一番がサブマシンガンを一丁持つて、のり面下を走ってくる。さつきガバメントでやられた奴等のだ。一丁を一番に渡して位置に着いた。

「あれはAK47だ。中国製だろう。それにしてもあの二人はプロだなあ。ぜんぜん動じていない。人を助ける、味方を守る。という使命感がしつかりと出来上がっているんだろうな。負けた。俺にはできないよ」

鈴木は少し気を取り戻しながら言った。

突然、道路の向こう側で派手に銃声がした。鈴木がのり面からそつと覗くと銃撃戦をやっている。ずっと左の方に政府軍の車両が見える。

「山下君。政府軍だ。政府軍が助けに来た。ゲリラはバスの向こう側らしく見えない。もう残っていても三人か四人だろうから、降伏しないと全滅する。ゲリラが氣の毒になつてきたなあ」

鈴木は思わず笑顔になった。

「山下君。みんなに、もう大丈夫だと伝えてくれ。政府軍が來たと」「はい。行つて来ます」

山下は、急いで知らせに走つて行つた。

政府軍の兵士が数人、サブマシンガンを乱射しながら、ゲリラに急速に近づいて行く。二人の兵士が転倒した。やられたらしい。それでも他の兵士が突っ込んで行く。

「勇敢だなあ」

鈴木は感動した。

どうやらゲリラは降伏したらしい。静かになつた。山下が戻つて来た。

「山下君。どうやら終わったらしい。もう一度伝令頼む。銃を持つ

ているものは、まとめて銃を道路へ置け。乗客たちは道路へ上がれ。ガイドをこちらへ。君は乗客の世話をしる」

言い終わると、鈴木はベレッタのセーフティをかけ、腰のホルスターにしまいながら、左翼のガードレールをまたいで道路へ出た。

全員無事

鈴木は政府軍の誰かが来るのを待つた。

「すべてはうまく行つた。日頃訓練したサバイバルゲームが役立つたことは間違いない。土方先輩に教わったことが全部出てきた。」こちらからは見えていて、相手からは見えない状態を作り出せば必ず勝てる」これだつたな。全戦闘のなかで、たつた一つの俺の目だけが全体を見ていたのだ。ただ教わっていないことしたのは、ゲリラを殺したことだ。相手を殺さなければこちらが殺されるのだから、これでいいんだ。もし最初、運転手のベレッタを拾わないで無抵抗のままだつたら、乗客全員がもつと悲惨な目にあつただろう。理屈の上では正当化できても、人間を殺したことには、俺の心はやはり納得しないなあ」

乗客たちは手を取り合いながら道路に上がっている。道路に散らばっているゲリラの死体を見て目をそむけた。お互いの無事を確かめ合いながら、かたまつて話をしている。

一番さんと、二番さんが銃を置いて手ぶらでやってきた。ガイドも来た。

鈴木は、一人に駆け寄つた。

「ありがとうございました。おかげさまで命拾いしました。みんな助かりました。あなた方の勇気と使命感には感動しました。ところで奥さん方はご無事でしたか

「畠山です。家内は無事です」

「鹿島です。うちもです」

「私は鈴木です」

島山は、挨拶もそこそこに、先ず質問をした。

「あなたの作戦、指揮はみごとでした。これだけの戦闘をして一人の怪我人も無しに勝つたなんて、信じられない。あなたの指揮能力はプロの士官クラスだが、いつたいあなたは、なにをしている人ですか?」

「ははは、越後の縮緬問屋の隠居です」

鈴木は、冗談のつもりで言つたが、誰も笑つてくれなかつた。

鹿島が続いて聞いた。

「武器の扱いと知識がお有りのようだが、自衛隊関係者ですか?」「それは秘密です。自衛隊ではありません。警察でもありません」

鈴木は困つて、口の中でもごもじ言つた。

「本当のことと言つても、理解されるはずは無いじゃないか

政府軍の指揮官が来たらしい。現地女性ガイドが走つて迎えに行つて、なにやら説明しながらこちらへ来る。指揮官は笑顔で鈴木に握手を求めてきた。口早に何かを言つているが聞き取れない。鈴木は握手を返しながら、「サンキュウ」と言つた。「英語は苦手だ」次に島山と握手をしている。続いて何かを話している。ときどき鈴木の方に目をやりながら話が続いている。

鹿島がそばへ来た。

「島山さんは英語が出来るようですね。元自衛隊の人だから戦闘経過を説明しているんでしょう。あの人、佐官クラスだったそうですよ」

指揮官は大いに驚いている様子だ。もう一度指揮官と握手をした島山は鈴木と鹿島の方へ来た。

「指揮官が言うには、追いつめられていたゲリラは、日本人を人質にして、政府と交渉しようとしたらしい。具体的には、捕らえられている仲間を釈放させる。島から政府軍を引き揚げさせる。こうい

う事には弱腰の日本政府に多額の金を要求する。その金で武器を買
い勢力回復を計る。そのような計画を持っていたらしい。それにし
ても、奴等は皆プロの戦闘員で、すごい奴ばかり。誰も怪我もしな
いで回避できたとは、とても理解できない。しかしそくやつたと誓
めていましたよ。あの調子では、おどがめは無しだと思いますがね」

鹿島が意見を引き継いだ。

「ほんとうに人質にされなくて良かつた。人質にされたらどんな悲
惨な目に遭わされたか、想像するだけでぞっとしますよ。だけど、
ゲリラが悪人とは限らないですよね。それはその国の政治に絡むこ
とで、外国人の干渉する問題ではありませんからね。でも、人質、
しかも外国人を人質にとるやりかたは、許せないな。最も姑息で最
低の戦法だと思いますよ」

鹿島はゲリラに対する怒りをあらわにした。

「だが、今回は違つた。日本人を甘く見ていた。これでもう奴等は
日本人を襲うことは無いでしょう」

鈴木はベレッタを腰から抜いてマガジンを抜きベルトへはさんだ
後、左手でスライドを勢いよく引いて薬室にある弾をはじき出した。
空中にある弾を器用に手で受けとめ、ベレッタのデコッキングセー
フティを入れてハンマーを降ろす。一旦ホルスターにしまい、手に
した弾をマガジンの最上段へ押し込んだ。「9ミリ×9ルガーパラ
ベラムか。これは本物だ。凄い弾だ」

マガジンをベレッタに「カチッ」と差し込んで、指揮官と話をし
ているガイドに言った。

「ガイドさん。指揮官に言つてくれませんか。ゲリラの武器を集め
てあるので収容して下さい。それと、この拳銃は運転手の私物だか
ら、運転手の家族に返すようにと」

ホルスターをベルトから外し、ベレッタを突っ込んで、指揮官に
渡した。受け取った指揮官は「OK」と言って、去つた。

ベレッタの手慣れた操作を見ていた鹿島がしつこく聞いてきた。

「あなたはやつぱり、ただ者じゃない。私たちだけには身分を言つて下さいよ。畠山さんどう思いますか？」

畠山もうなづいて真顔で鈴木の顔を見ている。

「困ったなあ。本当のことを話したら、あなた方きっと笑うんですけど」

二人とも、けげんな顔をして鈴木の次の言葉を待つた。

「実は、モデルガンマニアなんですよ。本物は今まで触ったこともないんです。本物そつくりのモデルなので銃の操作だけは精通しています」

畠山が言葉をさえぎった。

「それは判りました。でも、あの見事な作戦はどうしてですか？」

「サバイバルゲームというのをやっているんです。迷彩服を着て、モデルサブマシンガンを持つて、林の中を駆けめぐって、分隊対分隊で撃ち合つんです。

クラウゼビッツの戦争論も読んでいますし、「防御の利益」とか想像以上に高度なテクニックを持つていましてね、現職の自衛官が参加することもあるんです。私はその戦士です

「あははは、あははは」

二人は、最初は笑顔、ついには大声で笑つた。

「やっぱり笑つたじやないですか。言つんじゃなかつた」

鈴木は、もうイタズラっぽい青年に戻つていた。

鹿島が、鈴木の肩をたたきながら、

「笑つたのは、決して馬鹿にした笑いではありませんよ。鬼も恐れるプロのゲリラが、一人の素人に、してやられた痛快さです」

鈴木が特別な人でないことが判ると、二人は急に親しみが湧いて、三人で握手をした。

畠山は未だ笑つている。

「おもちゃの鉄砲で、戦争じつこね。あははは」

救援バスが来たようだ。

乗客達が、ぞろぞろ来る。OJ達が鈴木に手を振っている。

「今夜のホテルでのパーティーは、賑やかになりそうだね」

と、鹿島が言った。

(後書き)

登場人物は、次の俳優を思い浮かべるといいです。

鈴木	織田裕二
山下	林家正蔵
土方	阿部 寛

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8793m/>

サバイバルゲーム

2010年10月8日13時48分発行